

浄土

monthly
JÔDO

2013
November

11



2013
年『浄土』表紙の人

佐野芳朗



佐野 芳朗（さの よしろう）

走馬灯に手を翳しながら…

1939年愛知県は尾張瀬戸市、瀬戸焼の町に手打うどん屋の次男として生を受ける。瀬戸窯業の工芸を専攻、ノベリティーデザイナーに就く。

1962年上京、グラフィックデザインを学ぶ。

傍ら岡本太郎のアトリエで「かの子文学碑」ほかモニュメント製作に参加。

二科展デザイン賞、パフォーマンスとして「1000円作品展」活動 等。本邦初の「ボランティア」誌 40数年間製作。

全日本ろうあ連盟「絵で学ぶ手話」連作。

同時期、正力松太郎氏提唱の-全国青少年教化協議会-「おしえの泉」「びっばら」等の製作に協力。

最近は機関誌『浄土』にお招きをお受けております。

淀みの川を流れつ…

合掌

浄土

2013/11月号 目次

お浄土のはなし.....	ひろさちや	2
会いたい人 柳亭市馬さん (上).....	関 容子	18
響流十方	袖山榮輝	28
連載小説 渡辺海旭	前田和男	32
江戸を歩く	森 清鑑	38
誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48

表紙・表紙裏=2013『浄土』表紙の人 佐野芳朗

背表紙裏=泰雲の美味探訪



表紙題字=中村康隆元浄土門主

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会主催講演会 平成二十五年六月二十五日開催（於大本山増上寺慈雲閣）

お浄土の はなし

《前編》

ひろさちや

実は、私事ですが、去年の一月十五日、母親が亡くなりました。九十六歳。もう大往生です。それで、ちょっとその母の話から始めさせていただきます。

私の母は大正四年生まれです。父はとくに亡くなって、いつ亡くなったかというところ、よくわかりません。よくわからないというのは、戦争で戦後ソビエトの方に連れていかれて、強制労働で亡くなっているのです、いつ亡くなったかわからないのです。一九四六年に亡くなったことに公式にはしております。

ですから、ちょうど父の五十回忌が一九九五年にやってまいりました。私は五十回忌を勤めさせてもらったのですが、息子が親の五十回忌をやるのも珍しいですが、妻が夫の五十回忌ができるのは、もっと希有なことでしょう。私の母がまだ生きていて、五十回忌を勤めさせてもらったわけあります。

そのときに、私はお墓の前で母に言いました。私は大阪人ですから、

「お母ちゃん、もうすぐお浄土に行くんですよ」って言いました。

実はお浄土の時間というのは、私たちの娑婆世界の時間の単位と全然違ってきます。どれぐらい違うかといいますと、これはキリスト教の話ですが、キリスト教のある信者が神様に聞いたそうです。「神様、人間の世界の一年というのは神様にとってどれぐらいの時間ですか」と言った。「そうだな、おまえたちの一年はわしにとって一分ぐらいだな」と言われた。

「そうですか。それじゃあ、私たちの十億円って神様にとってどれぐらいの値打ちですか」と聞いた。すると「十億円なんてわしにとっては一円だな」と言われた。

そうすると、その男、「すいません、たった一円でいいですから、私に恵んでください」と言ったら、神様が言われた。「うん。あげるから、一分待ちなさい」

これは笑い話ですが、母に言ってやったんです。

「もうすぐな、お母ちゃんお浄土に行くで。それで、お母ちゃん、お母ちゃんがお浄土に行ったら、お父ちゃんがきつとこんなおばはん知らんわと言わはるで」って。

そのとき母は八十歳でした。夫と母が別れたのは三十歳のときです。ですから、八十歳のばあさんが三十歳のときに別れた夫と五十年後に再会して、こんなおばはん知らんわってお父ちゃん言うでって、母をちよつと冷やかしてやったんです。

お袋、「そやな」って言って、ちよつと寂しそうな顔をしていました。

お袋は実の娘と一緒に住んでいて、その妹に後で聞いたのですが、「お兄ちゃん、お母ちゃん、お父ちゃんの五十回忌の晩、何か荷物をこそご整理して写真を一枚、出してきたんやで」と。その写真はお見合い写真でした。

「このお見合い写真、わてが死んだらちゃんと棺桶の中に入れておいてな。お浄土に行ったら、私これですなんて言って、お父ちゃんに見せるからな」ってお袋は言ったそうであります。お葬式の時、ちゃんとお見合い写真を入れてやりました。きつとお浄土で、私、これですなんて言ってるだろうと思います。

でも、そのお袋に向かって言ってやったんです、亡くなる六カ月ほど前でした。

「お母ちゃん、もうすぐお浄土に行くやろう。ほしたらな、お浄土に行つて父ちゃんに会うんやで。そんならな、ちゃんとお土産を用意しているか」ってきいたんです。

「えっ、お浄土に行くのにお土産いるのか」って言うんです。

「当たり前のこと、いるやろう。手ぶらで行くつもりか。厚かましいで」って言ったら、「いや、そんなこと考えたことなかった。お浄土にお土産ってなんや」って聞かれたわけです。

お浄土にはお土産をちゃんと用意していかないといけないんです。どういってお土産を持つていけばいいかという話をきょうはさせていただくつもりです。

私も浄土宗の檀信徒なんです、浄土真宗のほうの話ですが、浄土の信仰の篤い因幡の源左という妙好人がおりました。その人がお寺に行ったとき、「どうじゃ、この中でお浄土に行く者、ちょっと手を挙げる。死んでからお浄土に行く者、手を挙げる」と言われ、因幡の源左さん一人だけ手を挙げたのです。

「そうか。おまえはちゃんと行くつもりか。なら、この中で地獄に行く覚悟を決めてるやつ手を挙げる」と言ったら、また因幡の源左さんがばつと手を挙げたんです。

「おまえ、どっちだ。地獄へ行くのか、極楽に行くのか、両方手を挙げるって、おまえ、どういうわけだ」って聞いたら、因幡の源左さんが言ったのは、「わしとしてはやつぱり地獄に落ちるわな。そのわしを地獄に落とさんようにするのが阿弥陀さんの仕事やろう」と言っただけであります。なかなかいい信仰だなと思います。鈴木大拙が書いている話ですが、なかなかいい話です。

私たちは、普通であれば地獄に行く。それを極楽に行かせてくれるのが阿弥陀さんだと、こう考えていただけであります。

それじゃあ、極樂浄土って一体どういうところなんだという、そこから話してみたいのですが、お浄土というのは一体どういう世界なんでしょう。

私は、お浄土について考えるときいつも言っていることなんですが、「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」という言葉があります。これは『阿弥陀経』というお経の中に出てくる言葉です。青色、青い光、黄色、黄色い光、赤色、赤い光、白色、白い光と読んでもいいわけであります。

これはどういうことを言っているのかと言ったら、『阿弥陀経』というのは、阿弥陀仏がおおいでになる極樂浄土の世界を描写した経典なんです。

極樂浄土には大きな池があつて、大きな池に蓮の花が咲いています。青い蓮もあれば黄色い蓮もある。赤い蓮もあるし、白い蓮もある。青い蓮は青く光っている、黄色い蓮は黄色く光っていて、赤い蓮は赤く光っており、そして、白い蓮は白く光っている。

こう書いてあるわけで、皆さん、これを聞いて当たり前だと思われるでしょう。青いものが青く光り、黄色いものが黄色く光る。この部分だけ取り上げてみます。そうすると、そんなの当たり前じゃないかと思いますが、これがお浄土なんです。

私たちの娑婆世界、お浄土に対して私たちの住んでいるこの世界を娑婆と言いますが、この娑婆世界ではどうなっているかという、青いものが青く光り、黄色いものが黄色く本当に光っているかと言ったら、ちよつと疑問なんです。

考えてみてください。青いものは優等生だと考えてください。そうすると、今度は黄色いものが劣等生になります。そうすると、優等生は優等生で光っていて、劣等生は劣等生

のままで光っているんだという、これが青色青光、黄色黄光ですね。黄色い劣等生は劣等生のままですばらしいんだぞというのがお浄土の世界なんです。

私たちのこの世界はどうですか。優等生はいいですが、劣等生は駄目なんだと、これが娑婆世界のありようです。それはおかしいじゃないか。そうじゃなく、優等生も劣等生もそれぞれの人がそれぞれに光っているんだという、これがお浄土だと考えていただきたいのです。

私たちの世界ではそうじゃない。だって、優等生が出てくるためには、優等生が存在するためには何が必要かと言ったら、劣等生がいてくれないと駄目なんです。劣等生が一人もいないで優等生ばかりにならないでしょう、この世の中。

どっちにしても劣等生も要るんだと。その劣等生は駄目で、優等生だけがいいという、そんな考え方はしちゃいけないというのが阿弥陀さんの教えだと、こう考えていただきたいわけがあります。

例えば、算数の試験で三十点しかとれない子供がいる。三十点しかとれない。その子があるとき七十点とって帰ってきた。お母さん喜ぶわけです。「きょうはあなたの好きなカレーライスをつくってあげましょう」と言って、台所でカレーライスをつくっている。

ところが、お母さん、大抵、気になるんです。カレーライスを作っている最中に「きょう平均点何点だったの」って必ずきくわけです。

そうすると、お子さんも、「お母さん、今日みんなよくできたんだよ。今日の平均点は八十四点だった」って言ったら、もうカレーライス作るの「やめた」になってしまうわけ

です。これが娑婆世界のありようです。

だって、日ごろ三十点しかとれない子供が七十点とった。七十点ってすばらしい宝物でしょう。その宝物を平均点以下だから「駄目」にしてしまうわけです。

何で三十点じゃ駄目なんですか。三十点をとっている。これは子供の責任じゃないんです、遺伝子の関係なんだから。皆さんのお子さんが三十点、まあ、いいんだ、遺伝子なんだと思うべきです。それが七十点とった。宝物です。

でも、百点とったってこの娑婆世界では駄目なんです。百点とって子供が喜んで帰ってくる。そうすると、お母さん、「よかったね。百点とった。でもね、きょう百点何人いたの」、「きょう百点六人いたよ」って言ったら、「何だ、あなたのほかに五人も百点いたの。この百点値打ちないわね」と、こうなってしまうわけです。これが娑婆世界。

そんなことないんだと。劣等生が劣等生のままでのびのび生きていける、そういうのが極楽世界なんです。そう考えていただきたいと思います。

あるとき、狐狸庵先生、作家の遠藤周作さんに聞いた話ですが、遠藤さんのところに一人の青年がやって来た。その青年は吃音症なんです。しゃべるのにどもる。うまくしゃべれない。ですから、事務系の仕事に回してもらっていたのですが、何の手違いか、セールスに回された。それで、自分はしゃべれないから、あの会社はやめようと思って遠藤さんに相談に来た。

そうすると、遠藤さん、「おまえな、会話というものはしゃべると聞くのと二つの要素があるんだぞ。しゃべるほうは苦手かもしれないけど、聞くほうはできるだろう。だから、

聞くほうに力を入れてちゃんとやればいいじゃないか。それでうまくいかないんだつたやめろ。それからいい」って言ってアドバイスをした。

その青年は、そういうわけで、新製品の説明なんていうのはパンフレットに任せて、相手の話を一生懸命聞くようにしてセールスに行った。そうすると、あの人、話がうまい人だと評判になって、営業成績が上がったというんです。

なるほど、世の中で、吃音を治すという方もおいでになります。しかし、吃音のままで堂々と生きていく、そういう感覚もあつていいわけであります。だから、劣等生が優等生になろうと努力する。それも必要かもしれない。でも、全員が優等生にはなれないんだから。そうすると、劣等生が劣等生で卑下する必要はちつともないんじゃないかと、私はそういうふうに思っております。

私のところに、あるとき、講演会が終わった後、一人の青年が憂鬱な顔をして控室に入ってきました。今にも自殺しそうな、そんな顔で私の部屋に入ってきた。ぼつりと言うのが、「先生、僕は引きこもりなんです。どうしたらいいですか」って。

「そう。いつから引きこもってるの」って聞いたら、「中学校から不登校になって、高校もろくに行っていないんだ。でも、一応、大学検定試験を受けて入ったんだけど、大学へ行けずに、今、二十八なんだけど、ずっと引きこもりのままなんだ。先生、どうしたらいいんですか」って聞かれたわけです。

私は自分の経験に照らして言ってやったんです。「そう。君ね、そういうふうにして引きこもっているんだね。でもね、君、せっかく引きこもりになったんでしょう。それじゃ

あ、もうしばらく引きこもりを続けなさいよ」と言ったわけです。

その青年、おやつという顔をして、にこつと笑ったんです。いい笑顔だったです。

みんな、引きこもりは駄目だ、駄目だと思い込んでいます。引きこもりをやめられるんだっただけですぐやめます、とつくの昔に。やめられないからこそ悩んでいるんです。そういう青年にやめたほうがいいと、そんなふうな言い方は私は残酷だと思う。「もうしばらく引きこもりを続けなさいよ」と言った。

結局、引きこもりは引きこもりのまんまで、そのまんまでいいんだということを言いたかったわけでありました。だって、それでよくないと言ったって治らないんですから。

そして、その青年に、「君ね、苦しくなるときあるだろう。そういうときにいい文句を教えてあげる。それは、『南無そのまんま、そのまんま。南無そのまんま、そのまんま。南無そのまんま、そのまんま』と、三度お唱えしなさい」と教えたのです。

皆さん、日ごろ、南無阿弥陀仏をお唱えになっています。ひよつとしたら、南無大師遍照金剛の方もおいでになるかもしれない、南無釈迦牟尼仏の方もおいでになるかもしれない、あるいは、南無妙法蓮華経、南無観世音菩薩の方もおいでになる。それぞれ宗派によつて違うのです。

もちろん、南無妙法蓮華経や南無阿弥陀仏をやめて、南無そのまんまに変えてくださいとは言いません。南無阿弥陀仏はそのまま南無阿弥陀仏とお唱えください。

でも、南無阿弥陀仏という意味はどういう意味かと言ったら、南無そのまんま、そのまんま。そういう意味だと理解していただきたいわけがあります。

この「南無」という言葉。これはサンスクリット語の「ナモー」という言葉を当て字にしたわけでありまして、南や無しという字に意味はないわけであります。

この「ナモー」という言葉は、「おまかせします」という言葉の意味なんです。阿弥陀さんに全てをおまかせしますというのが南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経は『法華経』の教えにすべておまかせしますということです。それが南無。

おまかせした以上は、どんなことになるかと、全部まかせたんだ、文句を言うなというのが、おまかせしますの意味です。

例えば、大学入学試験に皆さん合格したいと思うのは当たり前です。受験生はみんなそう思います。だから、「南無阿弥陀仏。どうか阿弥陀さん、私を合格させてください」とお願いするかもしれない。

しかし、落ちる場合もあるわけです。落ちたときに、「何で阿弥陀さん私の願いを聞いてくれないのか」という考え方はおかしいわけであります。なぜ落ちたんだと考えてみてほしい。

そうすると、皆さん、大学に合格したら幸せになれる、大学に落ちると不幸なんだと思っておられるかもしれません。しかし、大学に現役で合格して、現役で合格したのために、余り実力がついてないもんで、卒業できずに中途退学するやつもいるわけです。それだったら、一年浪人してから、じっくり実力を蓄えて入ったほうがよかったかもしれないんです。

あるいは、自分の入った年に相性の悪いやつがいて、そいつにいじめられて自殺する青

年もいるわけがあります。一年浪人したらすばらしい恋人に会ったかもしれないです。だから、合格したほうが幸せになるのか、落ちたほうが幸せになるのか、どっちかわかりません。

いいですか。"わからないことがわからないことだとわかることがわかること"なんです。難しい？簡単じゃない。"わからないことがわからないことだとわかることがわかること"なんです。

さて次は、黄色黄光、赤色赤光。今度は、黄色というのは黄金だと思っています。黄金ということは金持ちになること。赤貧という言葉がある、ちゃんと貧乏人になる。なかなかいい言葉です。

そうすると、金持ちは金持ちで光っているんだよ、貧乏人は貧乏のままで光っているんだというのが黄色黄光、赤色赤光です。

私たちの娑婆世界は、金持ちがよくて貧乏は駄目だという感覚でいる。これが娑婆の物差しです。でも、お浄土の物の見方は、金持ちは金持ちですばらしいんだ、同時に、貧乏人は貧乏なままですばらしいんだよということです。一体金持ちと貧乏人とどっちが幸せかわかりませんよ。

よく考えてください。金をうなるほど持っていても、家庭的に不幸な方がいっぱいいらっしゃる。金がうなるほどあっても、刑務所に入っている人もおいでになるわけです。どっちが幸せなのか。

インドの民話でこういう話があった。あるところに九十九頭の牛を持っている大金持ち

がいた。その男、あと一頭牛を手に入れるときりのいい百頭になるんだ、ぜひとも百頭にしたいということで、わざとおんぼろな服を着て、貧乏人になりすまして、そして、幼馴染みの家を訪ねていった。

そうすると、幼馴染みは一頭の牛を持って細々と生きてる。そこへ行って、「おまえ、いいな。ちゃんと牛を持ってやつとる。私は落ちぶれて何もなくなつて、子供たちに食べさせてやることもできなくなつた。幼馴染みのよしみで助けてくれ」と泣きつくわけです。嘘ですよ、もちろん。九十九頭の牛を持っているくせに、「私は貧乏になつて困つてるんだ」って言つて泣きついた。そうすると、貧乏人は気がいい男で、「僕だったら、この一頭の牛がなくても、女房と力を合わせて働けば何とかなる。だから、幼馴染みの君がそんなに困っているんだったら、どうぞこの一頭の牛を差し上げるから、連れて帰つて、お子さんにミルクでも飲ませてやつてくれ」って言つて牛を差し上げた。布施したわけですよ。そうすると、金持ちは、ありがとう、ありがとうと喜んで家へ帰つて寝ました。一頭の牛をあげた男も喜んで寝ました。どちらの喜びが本物でしょうかと、こういうことが民話の最後に書いてあつた。

それを読んだときに、私ははつと思ひました。この金持ちの喜びつてたつた一晚の喜びだと。そう思います。翌日、彼は、さあ、この次は目標百五十頭で頑張るぞとなるわけです。

目標を百五十頭にした途端に、持っている百頭の牛がマイナス五十頭になるわけです。マイナス五十というのはゼロ以下の数字ですよ。このマイナス五十をマイナス四十にし、

マイナス三十にし、マイナス二十にするために、あくせく、いらいら、がつがつと働かないといけないんです。

そして、百五十頭にできるかどうか分かりませんが、できたところでまた一晚の喜びでしょう。この次は目標二百頭で頑張るぞとなるわけ。そうすると、いつもマイナス思考になっていくわけです。

そして、彼は、自分の目標に近づけるために、あくせく、いらいら、がつがつとした人生を送らなきゃいけないんです。毎日あくせく、いらいら、がつがつとした人生を送っている。

それに対して、一頭の牛を布施できた男。気のいい男ですよ。女房と力を合わせて何とかなるんだと。生活の苦労は絶えないです。苦労はいっぱいするだろうけれども、しかし、彼の心は豊かであって、女房と力を合わせて働くんだ、そして、毎日のんびり、ゆったり、ほんとに生きていけるわけです。

どうでしょうか。あくせく、いらいら、がつがつとした人生と、のんびり、ゆったり、ほんとに生きていく人生とどっちが幸せなんでしょうか。今の日本人、高度経済成長だとかアベノミクスだとかって言って、経済ばかりで、結局、あくせく、いらいら、がつがつ的人生ばかり送られています。

ここにお集まりの大勢の方が敗戦直後を知っておられる。物のない時代、狭いながらも楽しい我が家でいた、あの貧しい時代、のんびりゆったり生きていた、ああいう感覚。どっちが不幸なのか分かりません。

歴史家によりますと、江戸時代の庶民は大体一日四時間しか働いていない。一日四時間ぐらいで、あと、のんびりやっていた、貧乏を楽しんで生きてたと言っている人がおいでになります。が、今、十二時間ぐらい働いているんでしょう。どっちが幸せなのか。

だから、金持ちは金持ちで幸せになれる道はあるでしょうが、同時に、貧乏であれば、貧乏なまま幸せになる道もあるわけなんです。貧乏は駄目で、金持ちにならないと幸せになれないと思ひ込む。その思ひ込み方がおかしいんだということに気がついていただきたいわけです。

お浄土はどっちでもいいんです。南無そのまんま、そのまんまだと考えていただきたいわけです。

もう一つ出しますと、今度は、赤色赤光、白色白光。赤い色というのは健康な人、血の巡りがいいということです。そして、白い色は病人になるわけです。つまり健康な人は健康で幸せなんだよ、光っているんだよということです。そして病人は病人のまま幸せ、光っているんだよということでもあります。

私たちは病気になるすぐに病気を治さないとイケないと、そう思ひ込んでしまっています。しかし、考えてみてほしいんですが、病気というものは治るまで治りません。はつきりしています。病気は治るまで治らないんです。

そうすると、治るまでの間、病人なんです。病人が駄目だと言って、風邪ぐらいの病気でもやっぱ二、三日ぐずぐずしないといけない。その間、嫌だ、嫌だと思つて、不幸だと思つて生きるよりは、病人のまま幸せに生きるようにすればいい。南無そのまんま、そ

のまんま。

病気になるば、そのまんま、そのまんま。そして、うまく治れば治って、治ったらいけない、もつと病人になれじゃないですね。治れば、そのまんま、そのまんま治れば言いわけです。

健康がイコール幸せで、病気がイコール不幸、そういうことではあり得ないわけです。だから、私たちは、みんなあるがまま、そのまんままで幸せになれるんだということであります。

私たちはついつい、健康がよくて、優等生がよくて、金持ちがよくて、そういう物差しばかりで物を見ている。しかし、この光というものの、光で物を見るんですが、光ばかりだったら本当は物は見えないそうです。

気象用語で、ホワイトアウトという現象が生じるそうです。それはどういう現象かというと、日本では北海道の本当に北のほう、南極大陸なんかで時々起きる現象です。空にうつらした雲がかかっていて、太陽が照りつけている。下は一面雪ですから当然反射するわけです。空から雪がばらばらと降っている。その降っている雪に光がまた反射する。そして、一面光だらけになるんです。だから、降っている雪、下からも上からもどこからも全部光だけになってしまう。そうすると、ホワイトアウトになる。何も見えないそうです。

光だらけになりますと自分の手すら見えないです。何も見えないです。自分の体も見えない。だから、そういうホワイトアウト現象が生じたときは歩いちゃいけないそうです。

歩きますとクレバスなんか落ちて命を失ってしまいます。ホワイトアウトになったらじっと待って、そういう現象がなくなるまで、じっとしていると言われているそうであります。

つまり、逆に言うと、私たちは、光に対して影があるから物が見えるわけなんです。だからもしも優等生だけになったら、今度、何も見えない。劣等生という影があるからこそ優等生が見える。これが娑婆世界なんです。

お浄土はみんなそのまま光っているから、逆に言うと、何も見えない世界なんだと思えばいいんだろうと思います。

(つづく)

古き伝統技 三代にわたる信頼

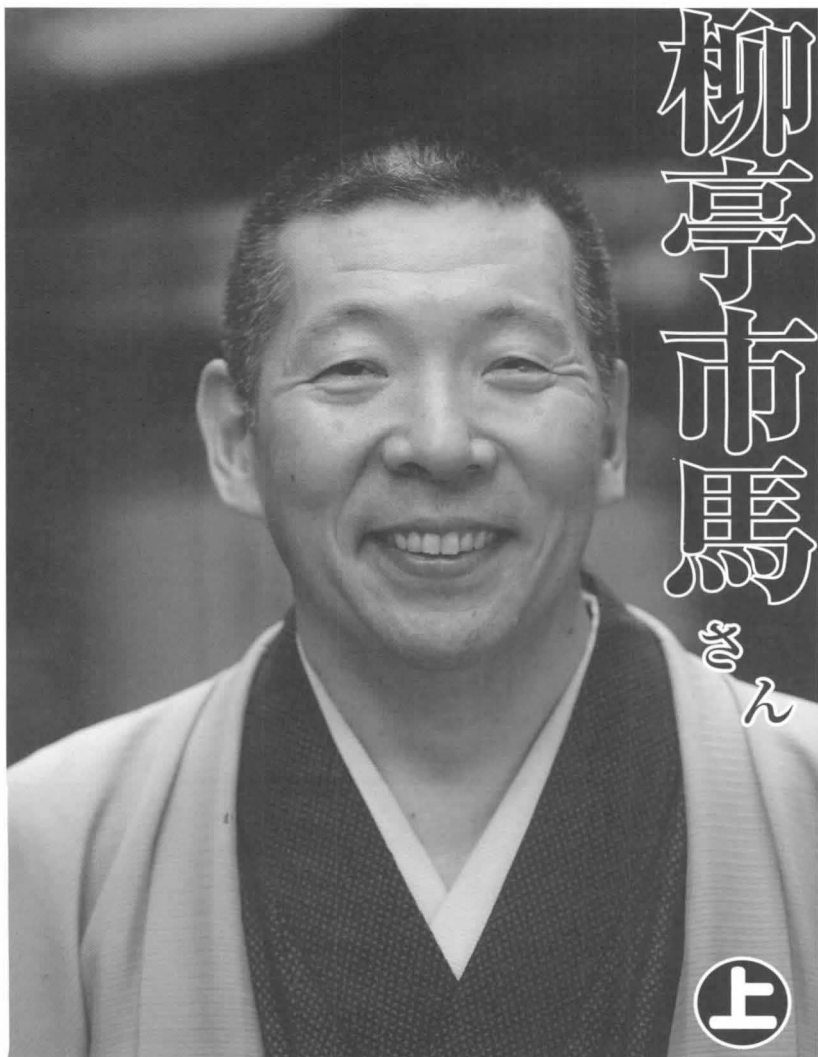
有限
会社

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替0018012145231

連 載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

「柳亭市馬」の名に私が初めて接したのは、ちよつと意外なことに文芸雑誌『文學界』（平成十八年七月号）の「私の読書遍歴」でだった。

「志ん朝師匠のお姉さんの『三人囃』に何度も泣かされました」という見出しに目が留まつて読み進むと、歌舞伎芸談を読むのが好きで、とりわけ脇役は自分を殺して脇に徹し、なおかつ色を出す、そういう人たちに注目していたら嬉しい本があった、というところまで頁を繰ると、なんと私の『花の脇役』『虹の脇役』を挙げてくれていた。おまけに旧作『中村勘三郎楽屋ばなし』や『芸づくし忠臣蔵』まで愛読してくれているという。

これはいつかこの人の高座を見に行かなくては、と思つていたら、これも意外なことに、女優の入江若菜さんのお誘いから偶然市馬さんを見る機会が訪れた。

それは立川志らく作・演出・主演の『鉄拐』てつかいという芝居で、劇場は新宿の紀伊国屋ホール

だった。元になるのは立川談志の得意ネタ「鉄拐」。

荒筋は北京の大貿易商、上海屋唐左衛門が正月大宴会の余興の芸人を探している。番頭の金兵衛が連れてきた鉄拐仙人は、腹の中からもう一人の自分を吐き出すことができる。この仙術は大受けで、鉄拐はぜいたく三昧。すると張果老というライバルが現れて、こちらは徳利の中から馬を出す芸の持ち主、という奇想天外な囃が現代ふうのアレンジしてある。

それで市馬さんと言えば、狂言回しの牧師役で、何の脈絡もなくときどき登場しては披露する歌が「上海帰りのリル」や「上海の花売娘」なのは、「上海屋唐左衛門」に因んだものらしい。感じのいい明るい美声と歌のうまさにびつくりした。

入江さんはと言えば、まだ若いのに、スラム街の暗闇に生きる老婆役を、面白がって演じていた。

それから何度か市馬さんの嘶を聞きに行つて、いつかインタビューをと思つていたら、さすがに歌舞伎好きだけあつて新橋演舞場の屋の部がはねて、劇場から出てくる市馬さんを見つけ、それが初対面だった。

市馬さんは昭和三十六年、大分県緒方町に生まれている。湯布院から車で四、五十分の町だが、御近所のよしみで御鼠舩も多く、亡き勘三郎さんが愛した亀の井別荘の落語会に近々出演する、とそのとき聞いたので、まずはそこを訪ねて中村屋の思い出話から訊ねてみた。

「あれは中村屋さんがNHKの連続テレビドラマ『バラ色の人生』に出演なさつて、うちの兄弟子の桂三木助がまだ柳家小きんだつた時分に、中村屋さんを兄貴分として募う役で出ることになって、俺、あんまり歌舞伎のことわかんないんでお前来てくれ、つてことでついて行きました。たしか料理のケータリ

ングの店の話か何かで、中村屋さんにこんな現代ドラマは似合わないんじゃないかと生意気に思つて見てましたが、終つたら食事に誘われて、それがもう飲んで騒いで実に楽しかった。でも、こんなに飲んで明日も芝居があるのに大丈夫なのかなと思つてましたけどね。

私が十二代目團十郎襲名を一幕見て観た話になって、『勸進帳』の大中村（先代勘三郎）の富樫が途中で一回上手へ引っこむときに、クツと泣き上げるところの真似をしたら、とても喜んでくださつて、そのころ私は南長崎のアパートにいましたから、方向が同じだから送つてくよ、つてタクシーに乗せていただきました。

その後、中村屋さんが国立大劇場に出ていて私が国立演芸場で、楽屋が近いので単独で伺つて、この間は二日酔大丈夫でしたか？つて言ったら、何、あんなもの、いちいち引かずらないよ、とおっしゃって、蕎麦を御馳

走になりましたから、まだ二ツ目の身分なのに、まずいよ、これ、と思って、その後は遠慮するようになりました」

『バラ色の人生』には「芸術は爆発だ!」の岡本太郎や、晩年の大スター萬屋錦之介もゲスト出演していた。

「岡本先生は待ち時間が嫌いで、しきりに『つらいなア、つらいなア』を連発しておかかった」

と、当時中村屋から聞いたおぼえがある。

ところで市馬さんのおはこと言えば三波春夫の「俵星玄蕃」だが、中村屋にはこの歌に特別な思い入れがある。先代勘三郎が元気なころ、何かで中村屋が先代の機嫌を損じ、そのまま大晦日に持ち越してしまった。両者とも何とかしたい気持はあるが、キツカケがつかめない。とうとうテレビの「紅白歌合戦」が始まったが、先代は苦虫噛みつぶし状態。やがてトリの三波春夫登場となり、「雪を蹴立ててサク、サク、サクサクサクサク……」

のところで手にした槍がツルツと滑った。それで大笑いとなり、すかさず中村屋が「パパ、ごめんなさい」と謝って、「いいんだいいんだ」となったそうだ。

「そうでしたか。あの歌は中村屋さんにとつていい思い出の、気分の晴れる歌なんですね。私にとつてもこれは大変に験のいい歌です。て、私が小学校五年のときにレコードを買ってもらって、一生懸命聞いておぼえましたけど、これがのちのちこんなに役に立つとは夢にも思いませんでした。」

そもそもは小朝師匠の結婚披露宴に三波春夫さんが来てお祝いに「俵星玄蕃」を歌ったそうですが、それから間もなく小朝師匠の一番弟子の圓太郎さんが真打披露をすることになって、『まさか本物は呼べないから、君やつてくれる?』と小朝師匠からお呼びがかかったのが偉い方々のいる前で歌わせていただいた最初です。

志ん朝師匠が一番前の席で喜んで聞いてく

おはこの「俵屋玄蕃」を歌う市馬さん。



ださってね。しかしあの歌は講談調のせりふがあつたり浪花節があつたり延々と続いて終りそうで終らないんですよ。いつも拍手もらつてお辞儀したりして、また続けるとお客様がこけてくれて、これがギャグになるんです。

この日も志ん朝師匠が立ち上がって拍手して、『御苦労さん』って前に出てきてくれて、御自分の席に戻ろうとしたところで私がまた歌い始めたら、派手にずっこけてくださったって（笑）。ものすごい氣遣いのお方でしたね。あんまり気を遣いすぎて寿命を縮めたんじゃないかと思うほどです。六十三歳ですからね。

中村屋さんも五十七歳。似たところがありましたね。これ、寿命というものがあつて、その中をうまく使つてギユツと凝縮された人生だったんじゃないかな、と思いますね、お二人とも。

その点、うちの小さな師匠はマイペースでしたから、八十七歳まで元気でした。長いこと落語協会の会長をつとめて、次期会長は志ん朝師匠と、うちの師匠もみんなも思つてましたからね。志ん朝師匠に先に亡くなられてしまつて、師匠はとつてもがっかりしてました」

それにしても小学校五年生が「俵屋玄蕃」に夢中とは、いったいどういう少年なのだろう。

「私の祖母さんが三波さん大好きだったんですね。それで私が歌つてみせると大喜びするものですから、自然にそうなったわけですよ。親は夫婦養子で……戦死した息子のあとに祖

母さんの遠縁に当る親父が養子に入つたわけです、家業は瓦屋でした。鬼瓦なんかは手で作つてましたし、丸い瓦は鉄棒で形をとりながら作るんですが、結構体力のいる仕事で、兄も私も学校から帰ると手伝つてました。

祖母さんが近所の年寄りたちとベンチに集つて、私を見つけるとあれやつてこれやつて、つてリクエストするんです。すると歌つたり、ラジオで聞き憶えた『痴楽綴り方狂室』とかをやるとすぐ喜ばれて、アメくれたりするんですけど、人にあんなに喜ばれると子供ながらに気分がよかったですね。私が年寄りに弱いという性質はここで培われました(笑)」

市馬さんを落語家への道につなげたのは、剣道とこの年寄りに弱いことの二点だった。

「中学に入つて剣道を始めるんですが、指導の先生がいなくて、ゴミ収集のおじさんができるといふんで、お願いして教わりました。

三年まで続けて初段取りましたからまあこれでいいやと思つていたら、お別れ会するとき

に、高校へ行つてからも是非続けてもらいたい、とその先生が。私はそのころから背が伸び出して百八十くらいになってましたから、竹田高校に進学したらラグビー部からの勧誘がすごくてね。でもかつての剣道部には十何人いましたけど、誰も続けるやつがない。それじゃあ先生が可哀そうだなと思つて、年寄りに弱いですから。本当は剣道なんて汗くさいし女の子にもてないしで、続けたくなかったんですけどね」

ところが高校剣道部の先生の師が剣道九段の大先生で、当時七段の腕前だった小さん師匠と親しい仲だったことがわかる。

「私は歌も好きでしたけど、嘶家になりたいとずっと思つて、結局その当時の教育大、今の筑波大の中野八十二先生を通じて小さん師匠のところに入門できたんです。師匠はおかみさんを亡くした直後で、もう内弟子は取らないって言つてたんですけど、これも剣道やつてたおかげですね」

高校卒業後、市馬さんの嘶家修行が始まる。「目白のお宅へ伺つて、私の本名は右藤泰幸ですから小ゆきという名前をいただきました。だいたいみんな小さん師匠の『小』と本名の一字から取つて、談志師匠は小よし（松岡克由）、小三治師匠は小たけ（郡山剛造）ですが、なんだかみんな芸者みたいで、特に私は小ゆきつて顔じゃないね、つてよく言われました（笑）」

市馬さんが入門してすぐ、小さん師匠が紫綬褒章を受章した。

「新聞を見て、朝からお祝いの電話がひっきりなしにかかってくるんです。三船ですが、は？ 敏郎です、とか。森繁です、とか、梅幸、松緑、羽左衛門、と次々かかつてきて、兄弟子たちが今度は俺が出る、次は俺、つて電話を奪い合つていましたね」

しかし、内弟子生活は、始めてみると実に大変なものだった。

内弟子の前座の先輩が一人いて、小三太という不思議な人。奇行の持ち主ですね。すぐに噺が飛んじやって、お客さんには何のことやらわからない。でも仲間うちには面白がられる、とそういう人なんです。師匠は、帰りが十二時すぎたら先に寝てもいいよ、と言っていますが、その時分は元氣ですから、滅多にそんな早くは帰らない。われわれは階下に寝てますから、玄関がガラツとあけば起きますよね。

とにかく内弟子生活は大変で、自分の時間というのがまったくありません。朝六時半に起きて、掃除して、お孫さんの花緑たちがまだ小学生でしたから、食事の世話をして、また別のところ掃除して、風呂焚きです。昔の風呂でガス栓ひねるところが九か所もあって順番おぼえるのが大変。そのうち師匠が起きてきて、道場で素振りして、ひと風呂あびて、食事になるのが十時半か十一時です。それまでわれわれは食べられません。おなかがすき

ましてねえ（笑）

歌舞伎役者の内弟子生活も大変で、「とにかく眠いのおなかですくのが修行でした」とよく聞いたものだが、歌舞伎の最後の内弟子体験者は昭和一桁くらいまでだから、市馬さんはずいぶん若くしてその苦勞を味わっている。

「師匠の家の近くにパン屋があつて、チヨコレートパンなんか実にうまそう。地方から出てきたばかりで、食べたいなあ、と思つてましたら、先輩がお金出してくれましたね。さあ、師匠が出かけたら食べようと思つて、裏手の靴箱にかくしといたんです。そこには師匠のシーズン・オフの靴が入れてある。普段は誰も絶対行かない場所なんで、そこへかくしときました。そうしたらその日に限つて、木戸ガラツとあけて一歩出たところで師匠がパツと足を止めて、『そろそろメツシュにすつか』つてきびす返してトットツと行つちやつて、あつ、行つちやダメ（笑）。下駄箱を

入門したてのまだ十代だった市馬さん。
さん喬さん(中)、小三太さん(左)と一緒に師匠のお
宅の前で。



あける音がして、しばし沈黙です。『誰だ、
こんなとこにパン置いとくのは。パンなんて
下駄箱に入れる性質のもんじゃねえだろう』
って(笑)。靴もはきかえないでそのまま出
かけてしまいましたけどね。あれ、もしかし
たら知ってたのかもしれない」

市馬さんは名物おかみさんだった小さん夫
人の三回忌のころに入門した。噂ではずいぶ

ん個性的な女性だったようだ。

「おかみさんが二つ年上で、小料理屋で働い
てたんですが、師匠のことが大好きで、追っ
かけだったそうです。師匠のほうは、また来
てるよ、やだな、って感じ。ある日どうい
う具合からか、どっかの店の二階で二人切りに
なってしまうって、おかみさんにいきなり手を
ぐっと握られて手ごめに遭ったんだそうです

(笑)。師匠はそのとき二十七歳で童貞だったんですって。ほんとに珍しい人で、志ん生師匠に吉原とかに連れて行かれても、自分は待ってる、って人なんです。その後は普通になっただけでしょうけど。

よく私は夫婦物の噺の枕で言うんですけど、師匠の帰りがうんと遅いと、おかみさんは玄関先で長柄の箒を持って、待ち構えてるんです。まるで俵屋玄蕃ですね(笑)。帰ってくると、『こらっ、盛夫っ』って、弟子の前で本名呼ばれて怒鳴られて、二階へ上ると組んずほぐれつ。灰皿が飛ぶやらガラスが割れるやらで、そのうちドターンと物すごい音がして、やがてキヤーツという悲鳴。それが男の声なんですって(笑)。何をどうされるとその声が出るのかわからないんですが、そのあとは静かになります。

あくる朝は、普段は別々の朝御飯を、一緒に召し上がるんだそうです。それが暗黙の取り決めだったんでしょうね」

そんなおかみさんにひと目会いたかった。ちよつと見が越路吹雪さんに似てたそうで、と市馬さんは言うが、私がテレビで見た限り果してそうだったか……と思う。

「うちの師匠はおっぱい大きいのが好きで、おかみさんは相当グラマーだったらしいです。どう？ いいだろう？ って弟子に見せる。見ないと機嫌悪いんですって。師匠がたまに、どうだ、いいだろ？ って自慢するところがあつて、兄弟子が、いいですね、って相槌を打つと、お前どうして知ってたんだ、って怒られるんだそうです(笑)。

おかみさんは民謡がお得意で教えてたそうなんです、お前、おかみさん生きてたらそれだけでもはまったぞ、って先輩が言うんですけど、私だって朝から教わるの、いやですよ(笑)」

(つづく)

もし我れ佛を得たらんに、国中の菩薩、金剛那羅延こんごうならえんじん身を得ずんば、
正覚を取らじ。

『無量寿經』卷上（第二十六那羅延身願）

私が仏となる以上、私の国土の菩薩たちが、金剛力士のように強靱で健康な身体を得られるようにしよう。万が一にも、それができないようであれば、その間、私は仏となるわけにはいかない。

（浄土宗総合研究所編訳『現代語訳 浄土三部経』浄土宗より）

力尽くでも

妻が小鳥を飼いたいと言いつ出したのは、三年前の春のこと。キンカ鳥をつがいで飼ひ始めた。でも、すぐに雌が亡くなつてしまつた。幼い雌をいきなりペアリングして矢継ぎ早に卵を産ませたのがいけなかつた。その後、妻は残された雄一羽の飼育を続けた。再び雌がほしいと言つたのは去年の春。雌を亡くしてから二年が経つていた。もともと雛を卵から育ててみたいと思つていた妻は、今度は慎重だつた。いきなりペアリングせず、雄雌を別々の籠に入れて隣り合はせにし、幼い雌の成長を待ちながら、互いの愛情が湧くのを期待した。夏が過ぎ、秋も深まつたころ、妻はペアリングを決断。二羽を一つの籠に入れた。仲睦まじい二羽の間に卵が産まれるまで、そう時間はかからなかつた。ある日、巢の中に三つの卵があるのが確認できた。翌日、卵はもう一つ増えていた。

キンカ鳥は子育てが下手という話だつたが、代わる代わる卵を温める親鳥。二週間ほどしただろうか、小さな摩擦音のような鳴き声がかえりこえた。警戒する親鳥の隙を突きながら巢の中をのぞくと、三羽かえ孵つているのが見えた。翌日、残る一つも孵つた。親鳥は口移し餌をやり、子育てに余念がなかつた。親鳥二羽、雛が四羽。鳥籠は一気に、にぎやかになつた。

キンカ鳥の成鳥はくちばしが赤いが、幼鳥は黒い。雛たちの羽毛が黒から成

鳥の彩りに変わり、くちばしの色も黒から赤に入れ替わりつつある頃、キンカ鳥一家に異変、いや来るべき変化が起こった。父親が子どもたちを威嚇し追いかけて回すのだ。父親の動きが次の子作りに移ったのである。このままでは子どもたちが怪我をする、母親もこの段階で再び卵を産めば体力の問題が生じる。妻は籠の中の父親を捕まえ、別の籠に移した。ほどなく、次の変化が起こった。今度は子どもたちが母親を追い回す。子どもらは全部、雄。母親を雌と認識した行動なのだろう。妻は籠のなかの母親を捕まえ、別の籠に移した。

一つの籠に子どもらだけ四羽。これでもういいかと思った。でも、まだ先があった。先に孵った三羽が一日遅れで生まれたチビさんをいじめにかかる。生存の競争原理だ。今度はチビさんを捕まえ、別の籠に移す。三羽になった子どもら、二羽が一羽をいじめだす。その一羽を別の籠に移した。籠は結局、五つ。部屋中、キンカ鳥のマンション状態になった。

でも、そのまま放っておいたら、誰かが傷つき命を落とす。無理矢理でも、力尽くでも、妻が繰り返し鳥たちを離ればなれにしたのは正解だったと思う。

ところで、冒頭的那羅延身の願。じつは、うさぎ年だった二〇一一年の二月号でも紹介した。その折は、我が家のウサギの話をしながら、極楽では「体調」

や「健康」が万全になって何の憂いもなく修行に邁進できるといった解釈をしたためた。その後、東日本に大地震と津波が起こった。何度か東北を訪れるなか、ある方の話をお聞きするうちに、その解釈では不十分であることに気が付いた。

どんな話か、今は語るまい。でも、そのうえで言えることは、極楽の菩薩たちは、ありとあらゆる世界に赴いて、苦しんでいる人々を救いたいと思っている。時には行く手を阻む邪魔者もいよう。深みにはまって動けない人を助けることもあろう。誰かに捕まっている人を救い出すこともあろう。菩薩には、力尽くでも前に進まねばならない時があるのだ。力尽くでも邪魔者を蹴散らす。嫌われようが、拒絶されようが、力尽くでも救い出す。だから、菩薩には格闘家のような力強さ、鍛え上げた強靱な肉体が必要というのが阿弥陀さまのお考えだ。

力尽くでなければ大切な人のいのちを守り切れない時がある。阿弥陀さまにも、そんなことを痛感するご経験がきつとあったのだろう。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第四十六回

第二部

ライン
来江の古城遙かなり

碧眼の比丘、ニヤーナティロカ その5



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は、小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。そんななか、ヨーロッパ初の比丘が誕生したと知り強い関心を覚える。法名は三界の智者を意味するニャーナティロカ。しかし、すでに彼は、海旭と行き違いに、南伝仏教の聖地セイロン（現スリランカ）に渡って修行中。爾来十六年、碧眼比丘が来日、ついに二人に邂逅の時が訪れた。所は海旭が帰国して住職をつとめる深川は西光寺。すでに海旭は日本を代表する社会派和尚。ニャーナティロカは国際仏教界の泰斗となっていた。二人は寺の庫裏で語りあった。碧眼比丘は、作曲家として将来を嘱望されフランクフルト高等音楽院に進学した時、菜食主義レストランで仏教に目覚めてから六年をかげビルマで比丘になるまでを語り、これに海旭は深い感慨を覚えながらも、仏教帰依の彼我の違いを想うのだった。

大蛇から

タイ王子を救う

庫裏の屋根裏でゴトゴトと賑やかな音がした。

ニャーナティロカも渡辺海旭も瞑目を解くと、碧眼比丘は比丘受戒の回想から、日本人和尚は十五歳の得度の回想からそれぞれさめて、思わず天井を見上げた。

海旭は怪訝な面持ちの碧眼比丘に言った。「おそらくネズミたちの運動会です。主催者は彼らの天敵の蛇でしょう」

碧眼比丘はますます怪訝な顔つきになって、「ネズミ？ 運動会？ 天敵？ 蛇？」と鸚鵡返しに言った。

「青大将といってもわからんでしょうな」と海旭は受けると、両手を広げた。「これぐらいはある青というより緑色をした大きな蛇が天井裏の主でして。わが西光寺の主とはいっても、昼間は眠っていて梁から床にどたんと

落ちるいささか間抜けなやつですが、夜になって腹がすくとネズミたちを追い回す。と、ネズミたちは大慌てに慌てて走り回って、ほれ、このようにどたばたと騒がしい運動会とあいなるという次第です」

「なるほど、ネズミと蛇の運動会ですか」と碧眼比丘は深く頷いて目を細めた。「私も蛇たちにはしばしば修行をさまたげられました。邪魔だからといって殺生をするわけにはいかんし。ビルマやセイロンにはその青いなんとかいいう蛇よりも何倍も太くて長いのがおりましてね、農民たちが飼っているブタが犠牲になることもあります。めったに人を襲うことはないのですが、しかし、あのときは本当に危なかった」

「といって碧眼比丘はこんなエピソードを語り出した。

ビルマで比丘になったニャーナティロカは、經典研究をさらに深めたいと南伝仏教の聖地セイロンへ移り住むことにし、そこでタイの

プリスタン・チュンサイ王子と入魂となった。王子は駐欧州大使をつとめた後、帰国してチュラロンコン国王を打倒して王位につこうとして失敗、セイロンに亡命して僧団（サング）の一員として修行中にニャーナティロカと出会った。ふたりはたちまち肝胆相照らし、コロンボ近郊の小さな島にココナツ椰子の葉で屋根をふいた庵を結び修行生活を共にすることになった。

そんなある日、夕べの沐浴の帰り道、うつそうたる密林をぬけようとしたとき、後ろに従っていた王子が大きな叫を上げ、ふりかえると、なんと巨大なニシキヘビに身体を捲かれているではないか。ニャーナティロカはサングダルをぬぐと、それを蛇の頭部へ投げて気をそらせると、わが身を投げ出した。すると、蛇は一瞬気をとられて王子をまく力がゆるんだ。その隙を逃さず王子は逃れ、それを確認してニャーナティロカも身体を起こし後ずさりして、事なきを得たというのである。

碧眼比丘は往時を思い出したらしく額にうつすら浮いた汗をぬぐうと、ふーっとため息をついた。つられて海旭も深いため息をつくと言った。「それは大変な災厄でした。タイの王子にけがはなかったのですか」

「あばら骨が何本か折れて、本当に危ないところでした」と碧眼比丘は答えた。「しかし、これが機縁で殿下にはいっそう親しくさせていただき、その後、私の活動の拠点をつくるのに大きな支援をいただきました」

「拠点とは修行と学究のための」と海旭は質した。

「いかにも。貴僧が拠点とされているこの寺のようなものです。そうそう、そこでも蛇にはさんざん悩まされました。さきほどお話をした大蛇よりもはるかに厄介な、猛毒のコブラです」

「といって碧眼比丘はまたぞろ蛇をめぐるエピソードを披露しはじめた。

不殺生成で毒蛇撃退

セイロンに移住してからのニャーナテイロカは、タイの王子の後押しもあって、当地では青い目をした高僧として広く知られるようになり、多くの崇拜者を集めるようになった。はるばるヨーロッパからも多くの得度志願者がやってきた。それには、修行のかたわらドイツ語に翻訳した『仏陀の言葉』の出版、さらにそれがドイツ語以外の言語にも重訳され、仏教思想がヨーロッパの知識人たちの間に深く静かに浸透したことがあずかっていた。こうした青い目の仏教徒志願にくわえて、セイロンや近隣のビルマやタイからも見習い僧志願が後をたたなかった。

また各地の大伽藍からダーマ(仏法)についての法話を求められた。それはタイの王子をはじめ有力大学の学長、高名な弁護士など大物支援者の肩入れによるところが大きかった。こうなると、タイの王子と二人で小さな島

の庵にこもって修行と研究に没頭しているわけにはいかなかった。そんなおり、有力支援者から、海沿いの古都ゴール近郊に浮かぶ島はどうかとの話があった。視察したところなかなかいい場所だった。さっそく所有者の了解を得て島の中央の空き地に五棟の小屋を建てると、得度してから七年、雨季が明けた夏に、三十人ほどの僧衣の弟子たちを引き連れて移り住むことになった。

ここで碧眼比丘は一息いれると、セイロンの方角へ目を泳がせた。「修行と学究にはうってつけの場所で、私は『島の隠遁所』と名づけました。『俗名』はボルガストゥヴァといって……」

「俗名とは面白いことをおっしゃる」と海旭は合いの手をいれた。「パーリ語で『ココナツ椰子』のことですな」

「パーリがよくおできになる」と碧眼比丘は返した。「その名のとおり、ココナツ椰子をはじめ、マンゴー、カシユーナツツ、パパイ

ヤ、ジャックフルーツ、パンノキ、野生ベリ―と、ゆたかな植生にめぐまれ、カメレオン、ねずみ、こうもり、かわせみ、ふくろう、あおさぎ、みみずく、オウム、ねずみ鹿など動物たちにとっては楽園の島。いや、われら人間にとっても、そんな愛くるしい動物たちと豊かな植物に囲まれ、そのうえマラリア蚊もおらず、まさに楽園でした」

生粋の江戸っ子の海旭は長い前置きにいささかシビレを切らして督促をした。「ところで猛毒の蛇はどうなりました」

「いやいや話が長くなって申し訳ない」と碧眼比丘は言った。「その楽園にたったひとつ招かれざる客、いや正確には先客がおりまして。コブラとそれよりもっと気の荒いラッセル蛇です。十匹以上の番犬がこれまでに彼らの毒牙にかかって命を落としました。もともと、犬が攻撃をしけないかぎり、蛇たちもかんだりはしないのですが、犬たちはいくら襲けても、蛇をみると怯えて吼えてつつか

かつてしまうのです。コブラが私の座っていた椅子の下にすることが何度ありました。こっちが吃驚すると、鎌首をもたげ、フードを広げて威嚇のポーズをとる。そこで私は『やあ、よくきた。元氣かね』と声をかけるんです。すると蛇は部屋を一周して外へ去っていきます」

「なるほど、不殺生戒の実践ですね。毒蛇にもそれが通じたと」と海旭は内心で感心をして大きく頷いた。実はどこかでニャーナティロカのことを、ドイツ留学中に会った仏教にかぶれた頭でつかちの青白いインテリの人だと思っていた。それはとてもない思い違いであった。蛇との接近遭遇を日常茶飯の出来事のようにさらりと語る。「楽園」というのもニャーナティロカ一流の修辞だと思われる。留学の途中にセイロンに立ち寄ったことがあるので想像がつくが、うっそうたる密林の地で庵を結ぶ修行は過酷きわまりない。実際は修験道の滝行や密教僧たちの千日回峰

など足元にも及ばない。そんな厳しい修行の中にあつてなお経典の研究・翻訳も怠りない。大した人物だと海旭はニャーナティロカを改めて見直したのだった。

またゴトゴトゴンと大きな音が天井でした。二人は思わず首をすくめ顔を見あわせて苦笑しあつた。

庫裏の壁にかかった時計をみると針は二時をまわっている。蛇談義はこれぐらいにしなければと海旭は思った。まだまだ話したいことが山ほどある。と、碧眼比丘も思いは同じらしく、向こうから先に話題を切り換えた。「ところで、貴僧は、最下層の人々のために救貧活動をされていると伺つたが……」

一転、社会的なテーマをふられて海旭は面食らつた。

おそらく碧眼比丘が言っているのは「浄土宗労働共済会」のことだと思われる。海旭は答えを返す前に、その立ち上げの経緯を胸中で反芻した。

(この項つづく)

第五十六回

江戸を歩く



青梅街道

大江戸ウォーカー
森清鑑

水と平行して走る。淀橋の周囲は茶屋に囲ま

れている。大勢の通行人。次に神田上水に架かる、二つ目の橋。こちらはやや幅広の低い太鼓橋。この二つの橋を淀橋と呼ぶ。これを渡ると左手に大きな水車小屋がある。ここで三代將軍家光は鷹狩りの際、休憩し、それまで面影の橋とか姿見ずの橋とか呼ばれていたのを淀川の京都側の流れに似ているということで以後淀橋と呼ぼうと名付ける。江戸ではちよつと奇異な感じの淀橋という名はこのような経緯で名付けられた。それにしても淀橋周辺の見事な田園風景は、今日では想像もつかないほど優美である。雪旦は「淀橋水車」みずぐるまと題し、この情景を描いている。非常に多くの通行人が歩いている。馬上の人、駕籠に乗る人、ぼてふり、旅の人。そこら中にある茶屋では一杯呑む人、食べる人、歓談する人が克明に描かれている。飼い葉桶に頭を入れてゐる馬。北に蛇行して行く神田上水の流れとその周囲の田園。全てが現在では信じられぬ

光景である。

熊野十二社権現社

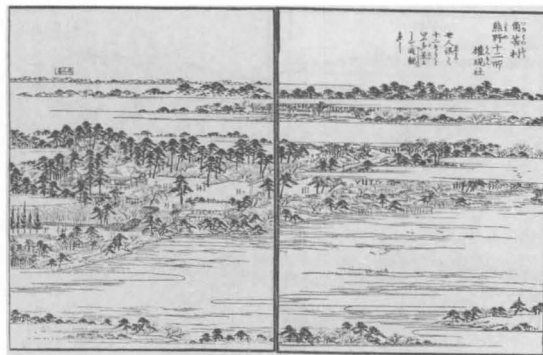
助水堀に架かる橋の手前の道を左に折れる。ちよつと歩くと左に百人組与力よりりきの小規模な大縄地が見え、田畑を縫うように細い道が蛇行している。助水堀を渡ってから、さらに南下すると、右手前方に池が見える。これが熊野十二社権現社くまのじふにさ権現社への入り口。熊野十二社は池を伴い助水堀に沿って（現十二社通り）南北に細長く拡がっている。参道は池まで行つて左の石段を上る。すると広い境内。境内の左を見ると、本社社殿が南向きに鎮座している。社殿の周囲には杉、樅、柏などの古木が茂り、靈感この上ない。境内の右側には鳥居が立っている。社殿を参拝し、



◆江戸名所図会「淀橋水車」中央青梅街道、右、やや上の小川が助水堀。茶屋と道行く人々。下から左上に蛇行する神田上水。淀橋の下に水車小屋。

再び石段を下りると前方に小池、大池を仕切る形で中島が突き出ており、麓に弁天様。北の方の小さな池は下池、南に展開する大きな池が上池である。この池は湧水池で上池から湧き出た水が下池を造っている。池の周囲には葦簀張りの涼棚がいくつもあり、また、茶屋や料亭が立ち並ぶ。さらに十二社敷地の東側をなめる玉川上水からの助水堀がちょうど社殿の辺りまできたところで滝となって流れ落ちている。これが熊野の滝で雪旦も広重も描いている。高さ三丈、幅一丈のこの滝に涼を求めようと社殿から降りてきて涼を求める人々。小さな崖と松の景観。雪旦は滝の反対側から見下ろす人々の姿を描いている。小さな滝がこの他にもある。夏ともなれば涼感この上なし。江戸享保年間に八代吉宗が鷹狩りの際に立ち寄り、この景観を大いに宣伝。以後、桜、紅葉、雪見の景勝地として文人・墨客が訪れるようになり、江戸の観光地として、有名を馳せることになった。

十二社^そとは当て字で、当初は十二相殿と言った。すなわち紀州熊野古道の三所権現、四所明神、五所の王子、併せて十二所を勘定して祀った社という意味である。江戸時代は熊野十二所権現社。何故、熊野なのか。その答えは熊野古道、藤代神社にある。藤代神社（現藤白神社）といえは、熊野古道九十九王子社のうち、五大王子に数えられ、その中でも最も格式の高い王子社なのだ。この神社の裏に鈴木家の屋敷がある（現存）。鈴木家は藤代神社の祠官であるばかりでなく熊野三山の祠官でもあった。全国の鈴木姓はここから始まる。つまり鈴木姓の元祖である。鈴木家の鈴とは稲穂がたわわに実り、こうべを垂れている鈴なりの状態か



◆江戸名所図会「角菩村熊野十二所権現社」絵の中央左隅から参道。前には上池がずっと広がる。参道左の石段を登ると境内。左に本殿、右に鳥居。池の周囲には葦簀張りの涼棚が見える。左上遠く連なる家は内藤新宿と思われる。

ら来ている、豊穰を司る祠官の意味。この鈴木屋敷に頼朝に追われた義経が逃げ込む。鈴木家当主は義経に従い、奥州平泉へ。そして東国各地を敗走することになる。鈴木の名が全国に散らばったのはそうした訳であるが、直系の鈴木九郎が、この地に住むようになったのは室町の応永年間（一三九四～一四二八）。彼は現在の中野坂上から西新宿一帯に住み、ここを開拓。商いで財をなし中野長者と呼ばれるようになる。そして故郷である紀州熊野三山より十二所権現を当地に移し奉る。

江戸時代を通じ、社殿は何度か整備、修復が行われている。享保年間より多数の茶屋ができ景勝地として賑わう。明治になると大きな料亭もでき、花柳界の花となり、料亭、茶屋百軒、芸妓数百名を擁する。池には屋形船が漂い、釣り、花火の遊興。

こうした江戸の景勝地は今では想像もつかない。明治三十一年、十二社東側一帯に玉川上水から引き入れた淀橋浄水場が完成（昭和

四十年東村山に移転）、新宿副都心計画がスタート。京王プラザホテル、住友ビル、三井ビル、東京都庁と次々高層ビルが林立。十二社の池も一九六八年完全に消滅。花街も一九八〇年代半ばに終焉した。

成願寺

十二社参拝を終え、再び参道に出て北に。最初の左に折れる畦道を行くと、曹洞宗、成

願寺門前。神田上水を渡るとすぐに山門。ここから非常に広い寺域が展開する。参道を直進すると広い境内にコの字型に本堂、庫裡が並ぶ。その奥、小高い森に囲まれた丘に熊野十二社を勘定した、中野長者鈴木九郎の墓が



◆広重 社殿より上池を望む。



◆江戸名所図会 十二社「熊野の滝」

ある。それもそのはず、この寺は彼が建立した寺で無論彼の菩提寺でもある。この寺域はもともと彼の自邸であった。ところが一人娘が若くして病死してしまう。衝撃を受けた九郎はしばらくの間呆然と時を過ごす。やがて意を決し、仏門に入る。そして自邸を寺院にする（一四三八年）。従って彼の墓もここにある。成願寺は熊野十二社の別当も兼ねている。寺域は江戸期の四分の一に縮小しているが現在も在る。嘗ての本堂の右手に山手通りが南北に通っている。

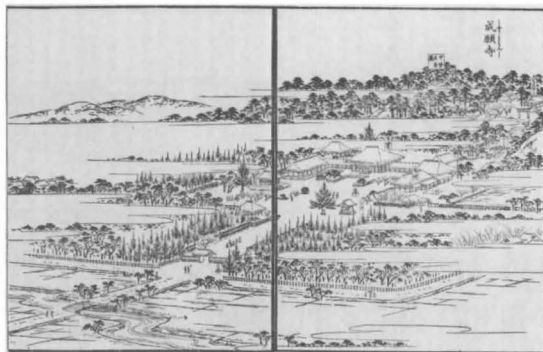
宝仙寺

青梅街道に戻ってさらに歩を進める。周囲は中野村。街道の左右に人家が急に増える。それもそのはず、中野宿の始まりである。内藤新宿が隆盛する前、ここが江戸からの最初の宿場であった。中野宿は下宿、中宿、上宿へと続く。下宿が終わりのところで右手を見ると街道に面して参道。仁王門を潜ってさら

に行く。山門。そして広大な宝仙寺境内。周囲はすべて田や畑である。

宝仙寺は、源義家が後三年の役の時、守り神の不動明王を安置するため開いた、約千年の歴史を誇る古刹。江戸時代優れた僧を排出し、歴代の将軍から篤い保護を受ける。将軍鷹狩りの休憩所としても利用された。中野村を開拓した堀江家の墓もある。立派な伽藍を誇り、特に三重の塔は、江戸六塔のひとつとして著名であった（戦災で焼失、再建）

この先、青梅街道は中野村の田畑を突っ切って高円寺村にたどり着く。



◆江戸名所図会中巻 成願寺
左下に神田上水が流れる。江戸の田園風景。

浄土誌上句会

●染

〔特選〕雲染めて落日早き葡萄園

石原 新

秋になると葡萄園では、バスでの団体旅行者を受け入れて、食べ放題などで楽しませるというのがはやる。この句もそれに参加したものだろう。「落日早き」というが、食べ終わる時間が迫っているというのだろう。

〔佳作〕藍染の浴衣清しや夕涼み

森 懐人

ひっそりと髪染めている夜長かな

西田由布子

秋夕焼け火の見櫓を染め暮れぬ

浜口 佳春

●井

〔特選〕汐たれしものをぎぶぎぶ海女の井戸

増田 信子

海に潜って、さざえやあわびを採って上がってくると、衣類から道具まで汐たれたものを、その井戸でぎぶぎぶ洗う。井戸は海岸に

近く、海女のためのものだが、夏には水泳に来る人達にもありがたいものである。

〈佳作〉

子規の忌の少しずれたる井戸の蓋

竹橋 一平

秋の蟬落城跡に井戸残る

斉田 仁

山裾の生家の井水西瓜割る

井村 善也

●自由題

〈特選〉

風音に急かされている冬支度

山口 信子

冬支度の時期が来た。着るものを入れ替えたり、することは何かとあるものである。あれやこれやと急いでいると、風の音が余計にそれを急かせるように聞こえてくる。冬の嫌いな人間には身にしみる一句である。

〈佳作〉

夏蝶の羽を休めている葉裏

山崎遣迎子

秋暑し隣の墓に鞆置く

内藤 隼人

田仕舞いの煙のいぶる入り日かな

中村 真一



誌上句会（編集部選）

■染

夕陽あび襖に染まるひさごかな
染まりゆく秋の山々陽も入るる
コスモスに染められている信濃かな
山の端を紫に染め驟雨かな
染色体に男と女秋暑し
夏の雨染めて来たりし寺の縁
皇居ごと染めどっかんと秋落暉

■井

正座して井筒に活ける竜胆花
苔むして古井戸に聞く虫の声
墓地にある井戸に色なき風の来て

當麻あさ子
佐藤雅子
小林苑を
村松芳郎
斉田 仁
山口信子
結城佐知子

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇一三年十月二十日

発表・『浄土』二〇一三年十二月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各一名・佳作各三名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

相湖自由題

■自由題

井の中はいい月も星もきれい
墓石は井桁に並び秋の雲
お菌黒とんば古井戸をのぞきこむ
天井に灯りの並ぶ九月かな
井目の九つの石開基の秋
三井寺の鐘聞き馴れし鉄線花
枯れ井戸を順次覗いて秋の暮

小林苑を
高橋恵美
近田 恵
村田 篠
宗像淑子
山口信子
水谷義和

年経りて若き精霊迎えけり
赤々と殉教の島夕焼くる
炎天下西に東に苦吟行
葉鶏頭無縁の墓に寄り添いて
赤いものとつ買ひ足し秋彼岸
秋の蟬少し離れて秋の蟬
大福の甘さひかえめ去来忌
秋暑し魚影のごとき墓苑地図
秋暁の淋しい魚の目をした児
元帥のような顔して秋鏝
出奔は刃物の匂ひ十三夜

當麻あさ子
山崎遣迎子
森 懷人
佐藤雅子
近田 恵
工藤 掉
山内桃児
相川雅子
村松芳郎
遠井多聞
生田香奈枝

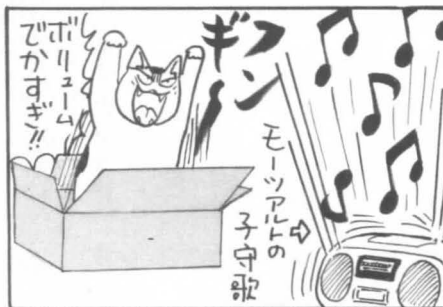
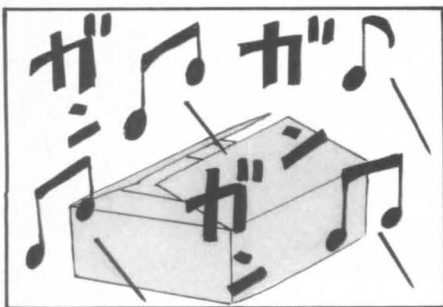
さっちゃんね

かまちよろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。
 福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞

(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞)



編集後記

ひざ抱いておぼろの月を寝待ちする 岱潤

夏の終わり、兄が亡くなりました。十六歳でした。六年間の闘病の末とはいえず、ある意味こんなに早いとは思いませんでした。でも前日兄弟、子供全員とお別れができた後での、兄にとつては覚悟の決まった死だったと言えそうです。父や母の来迎はとづくに来ていたようです。

三十五年も前に寺を出て、鉄道写真を撮り続け、鉄道・旅行雑誌の編集など、鉄道ファンの世界では一目を浴びている兄ですが、僧侶としては資格だけもっている、意識のない坊さんでした。お檀家のおつきあいもそれほどありませんで

したが、一部の檀家からはとてもかわいがられていた兄でした。だから娘が最後の姿はお坊さんにして欲しいと言ったとき、そのお檀家さんのことを考え僧侶の姿にしました。とてもりしいお坊さんとして、旅だつて行きました。

兄は一つのことを始めると、別のことに移ることができなくなるほど、集中してしまうタイプで、若い頃は二晩三晩の徹夜も平気でした。またお盆参りでも、一件のお檀家さんに二時間三時間と話し込んでしまい、家に帰ってくるのは決まって夜中になっていました。正に開高健の「悠々として急げ」を地で行く人だったといえそうです。人がいいの

に短気で、損ばかりをしているように見えましたが、多くの人に愛された人だったようです。冥福を祈ります。(長)

編集チーフ 編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤寛道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十九巻十一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年十月二十日

発行 平成二十五年十一月一日

発行人

編集人

佐藤良純
大室了皓

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八 六九四七

FAX 〇三(三三)五七八 七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・二八七

雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員のの方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山・清浄華院)
脇博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>



泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年



美味探訪

岩瀬酒造株式会社

御宿町

「月の砂漠」で知られている千葉・御宿海岸の近くで、享保8年(1723)より酒造りを続ける老舗・岩瀬酒造の『岩の井』です。

昭和22年に全国一位に輝き、全国的に名を知らしめました。その後も多くの受賞歴を誇り、千葉県を代表する地酒の一つになっています。第12回東京サミットの晩餐会の乾杯には「吟の舞」が、JAL国際線のファーストクラスでは日本を代表するお酒として、大吟醸の古酒が15年間採用されていました。

また、蕎麦の名店「翁」の主人“ダルマ”こと高橋氏は、蕎麦に合う酒として「岩の井」を店に置いています。

おすすめの商品、スッキリと飲みやすい『岩の井』吟醸原酒 720ml 1575円。フルーティーな香とまろやかな風味の『岩の井』大吟醸 720ml 3300円。山廃純米大吟醸『岩の井』720ml 3300円。酸味と甘みのバランスのとれたワイントイプの山廃一段仕込み『岩の井』720ml 2300円。

岩瀬酒造の母屋の梁は、慶長14年(1609) 御宿沖で座礁したメキシコ船「サン・フランシスコ号」の乗組員300名を、岩瀬家はじめ村民が救助したことで、寄贈されたサン・フランシスコ号の帆柱です。見学もできます。(要電話予約)



【岩瀬酒造株式会社】
千葉県夷隅郡御宿町久保1916
Tel 0470-68-2034
Fax 0470-68-5791
0120-68-2034

新

刊

案

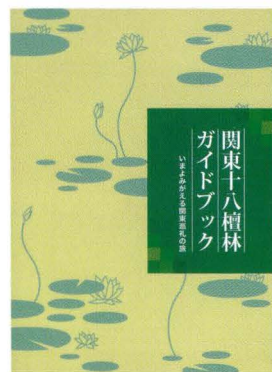
内



いまよみがえる関東巡礼の旅

関東十八檀林 ガイドブック

江戸時代に浄土宗僧侶の養成を目的として選定、創建された十八の古刹や名刹がついに一冊の本になりました。単立寺院となった二か寺を含む関東各地の十八の寺院を取材、その歴史から今に伝わるエピソード、さらにお寺巡りや団体参拝に役立つ周辺の見所や食事処、加えて詳細なアクセスマップに各寺院の基本情報も掲載された手元に置いておきたい待望の一冊です。また、巻末には江戸時代に十八檀林参拝の様子を記した撰門の『檀林巡路記』の現代語訳抄も掲載されています。



《十八檀林》

東	京	増上寺	傳通院	幡随院	靈巖寺	靈山寺	大善寺
千	葉	大巖寺	東漸寺		群	馬	善導寺
茨	城	大念寺	常福寺	弘經寺(瓜連)	弘經寺(結城)		
埼	玉	浄国寺	勝願寺	蓮馨寺		神奈川	光明寺

発行：関東十八檀林霊場会
A5版／カラー96頁
：800円（税込）

※本誌のお求めは、
法然上人鑽仰会 電話03-3578-6947 Fax03-3578-7036
または各檀林寺院、浄土宗文化局でもお求めいただけます。